

秋田市文化創造館  
開館後の架空の物語

NPO法人アーツセンターあきた

秋田市文化創造館が開館したら、館内でどんな出会いや出来事が起こるのか。

開館後のイメージを膨らませるため、NPO法人アーツセンターあきたのスタッフや秋田市職員が架空の物語をつくりました。

# ちょっと頼ってみる

---

28歳・育休中

私は生後4ヶ月の子どもをベビーカーに乗せて、なかいちを歩いていた。例年より早く咲いた桜は散り、若葉が茂って、空を見上げれば夏の雲がもくもくと湧いている。気づかぬうちに季節が過ぎていたことに、私はようやく気づいた。昼夜問わず何度も子どもに起こされ、頭の中は常にぼんやりとしていて、何なら今日は街まで来たのに、こんな適当な姿で来てしまった。帽子を目深に被り、人目を避けるように歩いていると、大きな屋根と丸窓のある、不思議な建物を見つけた。せっかく子どもも寝ているし、日陰でちょっと休もう。

デッキから中に入ると、コーヒーとパンの良いかおり。あたりを見渡しつつ、私は窓際にあるカフェの隅の席についた。そういえば子どもにミルクはあげたけど、自分のご飯を食べるのを忘れていた。そこで、BLTサンドとデカフェのコーヒーのセットを頼んだ。ほっとしてあたりを見渡すと、近くの白い壁面には映像が流れていて、子どもたちがお絵かきしたり、ごっこ遊びをしたりしている様子が映し出されていた。奥のシンプルなキッズスペースでは、ケラケラと笑い転げている子どもたちがいる。子どもたちが遊んでいる間、その子のお母さんは島根の郷土料理の本を読んでいた。私も何年後かに、こんな風に本が読みたい。

そうこうするうちにBLTサンドがやってきた。とっても美味しそう。さあ、と思ったその時、子どもと目が合った。やばい。案の定、声を上げて泣き始めてしまった。しばらく抱っこでご飯はお預けか、まあいつものことだけど。すると、近くにいたスタッフさんが声をかけてくれた。「大丈夫ですよ、ご飯まだでしょう？よかったら抱っこしましょうか？」良いのかな、、、すこし迷ったけれどお願いすることにした。私の姿が見えるところで子どもをあやしてもらっている間に、私は淹れたてのコーヒーを飲んだ。こんなにゆっくりコーヒーを飲むことができたのは久しぶりだろう？人の手を借りて子育てをするって、ああこういうことなのかな。

# わからないことを共有する場所

---

48歳・会社員

ここ1ヶ月は夕方になると、どこを歩いても笛の音や太鼓の音、そして高くあげられた竿燈が見える。私は夜に仕事があるから、いつも練習する姿をみながら足早にその前を通り過ぎていく。今日は夜勤明け、でもあまりにも良い天気なので寝るのはもったいなくて、ここへたどり着いた。木陰のあるベンチへ腰掛けると、近くで熱心に写真を撮っている人がいた。ハスの咲き誇るお堀の先の、にぎわい広場で行われている竿燈の妙技会の様子が見えて、確かに絵になる。竿燈の技を次々と決めていく男たちの姿をみながら、何か仕事以外に私もやりたいことってないのかな、とぼんやり考えていた。そういえばこの施設、何かとお節介してくれる場所だとラジオで言っていた。試しにちょっと行ってみることにした。

ウッドデッキから中に入ると、カフェと小さなショップがあった。ショップはミュージアムショップのようにも見える。今週の読書会のポップを見つけた。今週末の読書会は、サン=テグジュペリの「星の王子さま」か。その本を手にとってしばらく眺めていると、「よかったらコーヒーでも飲みながらご自由にお読みください」と、ショップの店員さんに声をかけられた。あまりにタイミングが良すぎて、とっさに「ありがとうございます」と答えてしまった。まあ、せっかくだし、と、カフェでコーヒーを頼む。あ、でもビールも良いな。結局、ビールと体に良さそうなサラダのセットを頼んだ。一息ついたところで本を読み始める。

本をゆっくり読むなんていつぶりだろう。ゆっくりとページをめくり、私は物語を読み始めた。自分にとっての「バラ」って、あの人、は違うか。「僕」と王子さまの関係性、、、自分で選んで読んでおいて、わからなくなってきた。読書会へ参加したら、もう少しうまく理解できるかもしれない。よし、今度は少し勇気を出して週末に来てみよう。参加しなくてもこの場所で、読書会に聞き耳をたてたって良いし。ビールを飲み干して、私はゆっくりと立ち上がった。



# 学校外の居場所

---

16歳・高校生

高校の授業が終わった後、文化創造館に向かう。天気の良い日はお堀を越える橋を渡るのが少し面倒だけど、あそこは図書館の学習室やフォンの6階より少しだけ遅くまで居座れる。階段を上がって3階の定位置を目指す。1階にも自由に使えるテーブルがあるけど、キッチンで誰かが料理をしているとお腹が減って集中できないから行かない。3階に向かう途中、2階の様子が見えた。今日はおじさんとお婆さんとスタッフさんがテーブルの上に置かれた四角い機械を覗き込んでいる。

帰り際、いつも「さようなら」と声をかけてくるスタッフさんが、「明日も18時から3Dプリンター使って遊ぶので、興味があったらぜひ」と言う。ああ、さっきの四角い機械が3Dプリンターというものなのか。あとでググろう

# 客席のむこうへ

---

18歳・大学生

私とその演劇を見たのはこの建物ができてすぐのことだった。この建物は学校に行く途中とか駅で買い物する途中に見たことはあったけど、認識したのは最近だ。あ、正確に言うと、この建物は私が生まれる前からあって、新しくリノベーションされた。今私はその建物の2階にいて、これを書いている。まあ、これは今日あげるブログのために書いてるんだけど、何か別の気持ちが湧いてきて、あ、それは何か、自分でも演劇とかやってみようかと思ったってこと。昨日まで私はここで向こうの壁の方を向いて、お客さんだったわけで、上の階の席も今は開放されてるけど、客席になってた。まあ、今度は上でも見たい。ようやく最近コロナが落ち着いて、あれから数えて何度目の春かわかんないけど、こうやってまた人が集まれることはよかったなって思う。その喜びみたいなことを普段は感じないから。今、私が悩んでるのはどうやったら演劇ができるかって聞くこと。なんかそういう相談にも応じてくれるみたいだから。今の時代、ネットで調べられることは多いし、コロナのせいで、おかげで？そこら辺もだいぶ先に進んだ感があるけど、まあせっかく来たんだし。下のカフェで買ったコーヒーがもうすぐなくなりそう。これを全部飲み切ったら行こう。



# 街のおしゃべり広場

---

32歳・フリーター

バイトを終えて文化創造館に向かう。今日は18時半から月に1回の哲学カフェがある。場所は1階のコミュニティスペース。テーブルをみんなでぐるっと囲うように座る。今日の参加者には秋田市内で働く会社員の人や大学の先生、学生や写真を撮るのが趣味だというおじいさん、それに文化創造館のスタッフの人もいる。普段、接点を持たないような人たちの物事の捉え方を聞くのは面白いし、自分で発言するのは恥ずかしいけど・・・、でも家族ともバイト先の人たちとも友人とも話さないような理念的な話を知らない人とする体験は、なんだか新しい。自分の生活の不安とか違和感とかそのままにしてきたけど、哲学カフェの時間の後は視点が增えるというか、脳みそがよく動いている気がする。今日の話の中で「内田樹さんの『下流志向 学ばない子どもたち、働かない若者たち』を読んだら良いよ」とアドバイスをもらった。今まで読書とかしたことがなかったけど、今日は帰りに明德館に寄ってみようと思う。

# 日常の祭り

---

65歳・無職

私がこの集まりに参加したのは去年の夏頃だったと思う。定年退職後、これといった趣味のない私にとって、当初この場所はただ、コーヒーを飲んだり、新聞を読んだり、月曜の散歩コースの一部だった。だが、今は事あるごとにここに通っている。ここには老若男女たくさんの方が集まっていて、変な気持ち悪さもない。私は元々、仲間意識や集団のようなものが苦手で、そういったことは避けてきたが、ここでは気楽に過ごすことができる。アートや芸術というと正直わからないし、私たちがやっていることと言えば、わかりやすく言うとただのお喋りだが、何かこれまでの私から自由になれた気がした。今度チームを作って、地元の祭りを復活させるプロジェクトをやるつもりだ。コーディネーターさんに相談すると美大の学生さんを紹介してくれることになった。市内の文化団体や文化施設も協力してくれるという。だが、目下の目標は妻をこの中に引き入れることである。

# ちょっと背伸びしてみる

---

36歳・文化創造館スタッフ

6月初頭の日曜の午後、私は先週末に終了した企画展の報告書作りに取りかかっていた。今回実際に企画した展示は、こちらの想定よりも、市民の来場者数は少なかった。どうしたら市民が興味をもってもらえるのか、会期が終わる前から私の頭の中はそのことでいっぱいだった。頭を抱えていると、入り口の扉が開いた。そこには小学生の男の子と、その両親と思われる男女が立っていた。お父さんが意を決したように話し始めた。「あの、文化創造館を使ってみたいんですが、、、」「詳しく話を伺いますね、こちらへどうぞ。子供会や、スポ少の校外活動のイベントなどですか？それともお父様が何か表現活動をされているとか？」「いえ、この子が展示をやってみたいと言うので連れてきました。」「おやまひかるです！」

話を詳しく聞くと、ひかるくんは、現在小学校6年生。今から3年前の夏の自由研究で、男鹿の海岸へ行き、海の生き物を観察したり、漂流物を拾ったりしたことがきっかけで研究にはまったという。その後も時間があれば男鹿へ通い、記録をコツコツと続け、様々なことがわかったらしい。調べてまとめた模造紙は何と20枚。この記録を展示してみたいのだという。面白いのは、彼が独自の視点でまとめた生き物マップや、周辺の人々へのインタビュー、そして実際に見たり、調べたりして描き上げた、たくさんの絵、

こちらの館の方針も汲んだ上で、両親の協力を条件として開催することになった。ひかるくんの創作物と、菅江真澄のコラボも面白いかもしれない。他の専門家から、ひかるくんの分析を見てもらったらどんな反応を見せるだろう、、、どんなことができるのか、私もワクワクしてきた。



# 疑問を誰かと共有する

---

38歳・OL

明日から文化創造館での展示が始まる。これまで秋田県で起こる自殺と自殺防止の取り組みについての記事をずっと一人でノートブックにスクラップしてきた。どこにも発表せず、ただ一人で続けていたことだった。いつの間にかノートは増え部屋の天井までの本棚を埋め尽くすくらいの量になった。ある日、文化創造館のコーディネーターさんにそんな話をしたら、「それ色々な人に見てもらって、意見交換してみませんか？」と提案をもらった。こんなただの趣味のような、日課のような、しかも暗いテーマのことを誰かに見せる価値があるとは思えなかったけれど、コーディネーターさんは他の来場者が足をとめて見てしまう資料の展示の仕方や、来た人が展示にどんどん意見を加えていける仕組みを提案し、一緒に作ってくれた。自分が抱えている「なぜ?」「どうして?」を誰かと共有することが、こんなにエネルギーを使うことだとは思ってなかった。

# 秋田のいまをうつす

---

42歳・クラフト出品者

元々美術館だった時に訪れたのは、もう20年も前、高校生の頃だっただろうか。2階へ続く階段を登った先の、ひらけた大きな空間に、平野政吉が藤田嗣治へ依頼して制作された巨大な絵画、「秋田の行事」が展示されていた。秋田の祭り、そして粛々と続けられていく人々の暮らし、その全てを包み込んだ作品を藤田は描き切った。平野は秋田の中心地であるこの場所へ、藤田との日々を思い起こしながら、この作品が一番美しく見える居場所として、この建物はつくられた。現在は藤田の絵画は近くに新しくできた美術館に移設されているが、平野が藤田の作品の為にこだわった、丸い天窓からは、今でも柔らかい日差しが差し込んでいる。

今日は、秋田県内外の食や音楽、クラフト系の作家が集まるマルシェの日。私たちの生活が一番生き生きとして見える「いま」の「秋田の行事」として、今日は様々な人が集う日になる。かつて藤田の大作がかけられていたこの場所は、音楽を奏でるステージとなる。青谷さんの伸びやかな歌声は、吹き抜けの3階まで広がり、訪れた一人一人の心を震わせる。3階からはこのステージを見下ろすことができるし、口の字型の通路は、クラフト作家の展示や販売が行われている。私は陶器の食器を販売する。ベテランから学生まで出店者層も幅広い。どれも魅力的で目移りしてしまう。1階では、公開キッチンで実際に料理を作る実演と、その脇では山菜や畑で取れた野菜が並んでいる。どうやって下処理するかは、売っている人に聞いても良いし、実際に調理している様子を見ても良い。今はGoogle先生に聞けば大抵のことはわかるけど、湯がくベストなタイミングは間近で見たいし、熟練した手さばきを見るのも楽しい。もちろん丁寧に下処理をされた山菜も売っているから今日の晩御飯にでもいける。今日はわらびのおひたしと袋吊りの限定酒で決まった。野外の芝生では、山菜採りを始めるための軍手や、腰につけるカゴ、ちょっとおしゃれな作業着なども売っている。自分一人では見えなかった世界が「いま」この場所に広がっている。平野がこの景色を見たら、彼は一体何を思うだろう。

# 大人の自由研究

---

25歳・フリーター

8月の土曜日、今日は文化創造館で開催されている「夏休み特別企画展」を見に行く。その展示会は、色んな領域の専門家が秋田で夏休みの自由研究を行い、発表するというもの。音楽家の人は西馬音内盆踊りの歌にフォーカスした音の作品を発表していたし、建築家の人は秋田市内をフィールドワークして「トマソン」と呼ばれる変わった建物や看板の場所を示すマップを作っていた。美術作家の人は移動式のテーブルを街中に持ち出して、秋田の人と対話する場所を設けていた。どうやら南方熊楠の哲学思想を追うプロジェクトの一環らしい。どの自由研究も一見突拍子がないように見えて、だけど丁寧に調査をしていることがわかる、それにどれも楽しそうな研究だった。もし自分もこれから自由研究をするとなったら何をするだろう。そんなことを考えながら、1Fのコミュニティスペースへ向かう。このあと1Fで秋田美大の先生による「粘菌研究クラブ」がある。今日は南方熊楠の作品を作っていた出展者の人もゲストで参加するらしい。



# 秋田のヤバイ場所

---

17歳・高校生

街を歩いている。ちょっと今、頭の中が整理できない、拡散されてごちゃごちゃになった感じ？いやそれとも、すごくシンプルに一本整理されたのか？とにかく何か強い衝動に襲われて、でもどうすることもできずにひたすら歩いている。今日見た演劇のせいだ。世界的に活躍する演出家らしい。演劇ってといういわゆる劇団四季みたいなイメージしかなかったけど、そのイメージは大きく覆さされた。あれをどう説明したら良いんだろう？！正直よくわからなかったけど、なんか面白かった！もっとうまく言えたら良いけど、、言葉が見つからない。その熱は今も続いてて、お風呂につかり過ぎて意識が朦朧になったみたいな感じ？多分他のお客さんもそんな感じだったんだと思う。劇が終わって（終わりというのか？）、一瞬静かになった。そんな静寂が訪れて、私含めて、口バカーンみたいな。でもその後ブラボーみたいな感じになって、思わず拍手しちゃった。恥ずかしい表現だけど、今はこれが限界。あの劇団なんだっただろう。あれが演劇っていうのかな。家に帰ったらいろいろ調べてみよう。あーまた見たいな。てゆうか誰かと喋りたい。いやここは我慢か、もう少し、自分の中で整理しよう。あーまた見たいな。もしかして、もっとヤバいやつもある感じ？ダンスとかも？だったら見たい。秋田に見れる場所があるなら、もう少しここにいても良いかな。

# 受け継ぐこと

---

42歳・会社員

すっかり足腰の弱くなった母が、公園に行きたいと言った。母が言う公園とは千秋公園のことだ。行けるか？と聞くと大丈夫と言う。心配になったが連れて行くことに。車を家に寄せとくからと言うといらないとの声。今日は歩きたいらしい。5月だというのにもうすっかり暑い。ゆっくりと進む母にイラつく気持ちに我ながら嫌悪感を覚える。ババヘラを横目に見て、図書館を過ぎ、さあ進もうとなった時、ここまでで良いと母が言った。なんで？と聞くと、もうしんどいと言う。先に言っただろ、あの坂無理だって、車で行こうって。いやここで良いと母は聞かない。じゃあ良いよ、帰ろう。目的地に到達できなかった腹立たしさで、足取りが早くなる。振り返ると母がある建物の前で立ち止まっていた。母の背中越しに看板を見る。「ささら踊り」「え？」「ささら踊り、昔は町内ごとにやっててね」「見たいの？ちょうど30分後かな」「もう無くなっちゃったと思ってた」どうやら消滅しそうな祭りを復活させるプロジェクトらしい。市民も巻き込んでやってるのか……。先をゆく母の背中を追う。

# 新しい何かが見つかる予感

---

39歳・主婦

市役所に住民票を取りに行った時、パンフレットスタンドに入っていたチラシをいくつか取って帰ってきた。その中の一つに「文化創造館 ニュースレター vol.5」と表紙に書かれたパンフレットがあった。たしか去年、美術館を改修してリニューアルオープンしたという記事を新聞で見た気がする。パンフレットの中には、先月まで開催されていた夏休み企画の写真や作品紹介、「街中クリエイター図鑑」というコーナーもある。この号では秋田市内で農業に取り組む人のインタビューが載っていた。裏表紙にはゆるいイラストの漫画もあって、普段読む新聞や家に届くタウン誌ともなんだか違うし、今風な感じがする。スマートフォンで「秋田市文化創造館」と検索してみると、公式のウェブサイトが表示された。ウェブサイトにはイベントスケジュールや今月のおすすめレシピ、「やってみたい！をコーディネーターがお手伝い！秋田のクリエイション駆け込み寺！」と書かれた相談受付フォームもある。「アーカイブ」というページを開くと、「未来の生活を考えるスクール」や「200年をたがやす」、「〇〇さん家の味アーカイブ」、「粘菌研究クラブ」、「DIY研究会」、「クリエイター・レジデンス」などいろんなプロジェクトの記録写真やレポートが載っている。さっき見ていた「ニュースレター」のバックナンバーも読めるらしい。これまで行ったことがなかったけれど、次の休日にでも娘と行ってみようかしら。



# 興味の周辺

---

69歳・無職

定年前は、仕事の出張の度に、兵庫にある姫路城や、神奈川の小田原城、近くだと青森の弘前城など、城が好きでよく足を運んでいた。最近では年金暮らしで、あまり思い切って遠出はできなくなったが、秋田城跡や久保田城跡の千秋公園、特に佐竹史料館はよく行く場所だ。最近娘に秋田の歴史を熱弁したが、全然興味を示してくれない。なぜだ。聞けばリアリティがないのだという。私からすれば様々な人の思惑が交錯した素晴らしい人間模様である。

どうしたらこの面白さを理解してもらえるのだろうか。もっとストーリーに共感できるようしたら良いのだろうか。娘には無理だろうが、最近いつも遊びに来てくれる孫には秋田の歴史に興味を持ってもらいたい。一体どうしたら良いだろう。

佐竹史料館の受付で、そんな話をしていると、受付の職員さんが、そんな私にはもってこいのおすすめのトークイベントが文化創造館であるという。美大の井上先生という名物先生と、佐竹史料館の学芸員さんとのトークイベントらしい。秋田とヨーロッパがシルクロードで繋がる話らしい。何かヒントがあるかもしれない。ちょっと行ってみるか。

# 初めてだけど、懐かしい

---

21歳・大学生

初めてのひとり旅。東北、しかも秋田。秋田といえばなまはげ、きりたんぽ、秋田犬、くらいしかもともと知らなかった。駅からホテルまではなんとかたどり着いたけど、雪が積もっていて、なかなか遠くまで歩くのはしんどい。ホテルの人にどこか近くで面白いところないですかね？って聞いたら、「文化創造館は、最近できた面白い施設ですよ」って勧められた。秋田駅から歩いて7分くらい。ちょっと行ってみることにした。

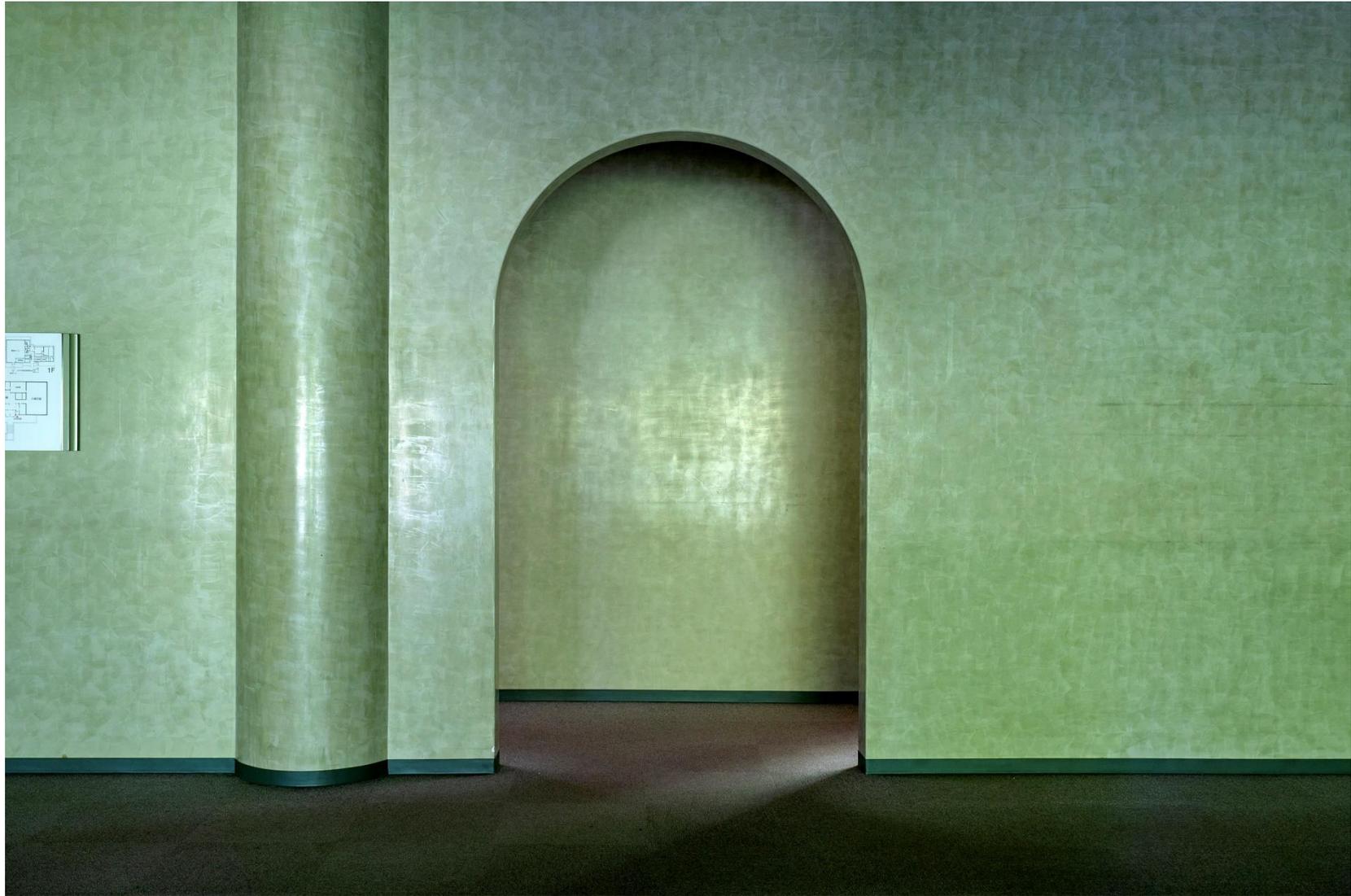
入り口で雪を払って中に入った。あ、あったかい。しかも、醤油の、、なんか良い匂いがする!!! 良い匂いに誘われて2階から1階へ降りると、広場の傍に広々としたキッチンがあった。立て看板に、今日は佐々木家のおばあちゃんの味アーカイブ、と書いてある。佐々木さんちのおばあちゃんが作る、ネマガリタケを使った煮しめのレシピ、、、気になる。キッチンに目を向けると、佐々木家のおばあちゃんとそのお嫁さん、お孫さんが一緒に仲良く煮しめをつくっていた。近くではスタッフの人がカメラでおばあちゃんの調理している姿を撮影している。「しったげつぐっでも、いっつもタケノコばかり先になくなるがら、みんなで食べるのだば、春に頑張らねばね、熊と競争だー」と、おばあちゃんは笑っている。春に採ったタケノコを自分で缶詰にしておいて、ぜんまいは春のうちによくもんで干物にしておく。素晴らしき冬の保存食レシピ。なんて良い暮らし。キッチンの脇にあるモニターには、5月の佐藤家のおばあちゃんのアイコの天ぷらを揚げる映像が流れていた。アイコって何？山菜の女王？ああとにかく美味しそう。あ、婦人会でつくってる缶詰がショップにも売ってるんだ。お母さんのお土産にしよう。秋田って寒いけど、良い場所だな。自分のおばあちゃんの肉じゃが、食べたいな。今度の帰省の時、おばあちゃんに作り方、教えてもらおうかな。

# 久しぶりの秋田帰省

---

30代・帰省者

秋田には久しぶりに帰ってきた。お？駅前が芝生広場になっている。ぽぽろーどの上から見下ろすと気持ち良いなと思いながら歩いていくと、アゴラ広場でビアフェスやってるんだ……。お酒が出ると秋田も人が集まるな。通り抜けると仲小路。あ、こっちでも屋台出してるんだ。ところどころになんか現代アートの作品があるぞ？追っていくか。作品につられてなかいちまできたら、千秋公園が見える。お堀の向こうの芝生広場はマルシェかな？コーヒースタンドもある。行ってみよう。「文化創造館」ってなんだ。秋田の街ってこんなに繋がってるんだ。今まで気づいていない風景見ちゃったな……。これからおもしろくなりそうだから秋田、友人連れて戻ってくるか？



# 寄り道

---

26歳・会社員

あきた芸術劇場でコンサートをみた後、一緒に来たよっちゃんがなんか食べたいと言った。どこかあるかなと思っていたら、目の前の芝生広場にキッチンカーがあるのが見えた。「あそこにしよう」と言って、道を渡る。芝生広場に入ると、キャンプ椅子に座ったおじさんの話を大学生くらいの若者たちが聞いている。「獣を撃つ時は、カメラのシャッターを押す感覚と似ていてな、目をこう、ぎゅっと凝らして…」向こうに三脚とビデオカメラがあるからマタギの人の映像でも撮っているのかもしれない。その横を通り抜けると、今度は土塁をものすごい勢いで駆け上がる男の子たちと木陰のベンチに座るカップルがいる。ウッドデッキに出されたテラス席ではおばさまたちがコーヒーを飲みながらおしゃべりをしていた。私とよっちゃんはキッチンカーに向かって歩いていく。お堀に蓮の花が咲いているのが見える。よっちゃんが「おー、映えそう」と言う。確かにきれいだ。さっきまで窓のない空間にずっと座っていたからか、この芝生広場はとても気持ちが良い。

# 一步を踏み出す

---

40代・公務員

茶道の稽古をした帰り道。少しだけ足を伸ばして千秋公園に向かう。今はまだ桜の季節だけど6月には爽やかな新緑のもと、千秋茶会が開催される。外でたてるお茶はまた雰囲気が変わり、五感が刺激されるんだよな・・・と改めて思う。あれ？お堀沿いの建物、文化創造館って、前庭が気持ち良さそうな芝生だ。ここで野点をしたらまた気持ちいいだろうなあ。あ、そうか！和服を着て集まってもらってもいいけど、カジュアルなお茶会できないかな？そう思いながら館内に入る。文化創造館のコーディネーターってそういうチャレンジの相談に乗ってくれるんだ。話してみようかな。「妄想が現実になるかも」そう思いながら、一步踏み出してみる。



執筆 NPO法人アーツセンターあきた（有馬寛子、島崇、藤本悠里子）  
秋田市企画財政部企画調整課 職員有志

写真 草薨 裕

※この物語はフィクションです。